令和４年度かながわ水源地域活性化計画フォローアップ会議
開催結果

１　会議名

かながわ水源地域活性化計画フォローアップ会議

２　開催日

令和５年２月27日（月）　14時30分～16時20分

３　会場

あつぎ市民交流プラザ　ルーム502及び503
（厚木市中町２丁目12-15）

４　議題

（1）令和４年度「かながわ水源地域活性化計画」に係る取組状況について
（2）令和５年度「かながわ水源地域活性化計画」に係る取組予定と今後の課題について

５　出席者等

別紙１のとおり

令和４年度かながわ水源地域活性化計画フォローアップ会議出席者名簿

(1) 委員

	氏　名	御　　所　　属　　等	出欠
1	宮林　茂幸	東京農業大学客員教授	出席
2	鷲尾　裕子	松蔭大学観光メディア文化学部客員教授	出席
3	中里　正巳	(一社)相模湖観光協会事務局長	出席
4	石田　貴久	石田林商代表、かながわ水源地域の案内人(山北町)	欠席
5	米田　博行	芳雅美術工芸代表、 かながわ水源地域の案内人(愛川町)	出席
6	岩澤　克美	ＮＰＯ法人「結の樹　よってけし」理事長、 かながわ水源地域の案内人(清川村)	出席
7	志村　政浩	(公財)宮ヶ瀬ダム周辺振興財団常務理事	出席
8	内田　和也	相模原市緑区役所津久井まちづくりセンター所長	代理出席※1
9	鈴木　和夫	相模原市緑区役所藤野まちづくりセンター所長	代理出席※2
10	和田　薫	山北町農林課長	欠席
11	齋藤　伸介	愛川町環境経済部商工観光課長	出席
12	村上　貴史	清川村産業観光課長	代理出席※3

(2) アドバイザー

	氏　名	御　　所　　属　　等	出欠
1	入江　彰昭	東京農業大学地域環境科学部教授	出席

(3) 事務局

	氏　名	所　　属	出欠
1	門倉　直史	神奈川県政策局政策部土地水資源対策課副課長	出席
2	村岡　忠博	神奈川県県央地域県政総合センター企画調整部長	出席
3	磯崎　孝喜	神奈川県県西地域県政総合センター企画調整部長	欠席

※１　榎本　哲也　主査(相模原市緑区役所津久井まちづくりセンター)が代理出席。
※２　安部　直樹　総括副主幹(相模原市緑区役所藤野まちづくりセンター)が代理出席。
※３　嶋崎　優作　主事補(清川村産業観光課)が代理出席。

令和４年度かながわ水源地域活性化計画フォローアップ会議　議事録

１　あいさつ等

⑴ 事務局あいさつ（門倉土地水資源対策課副課長）

お集まりいただきありがとうございます。土地水資源対策課副課長の門倉と申します。

このフォローアップ会議は今回２回目の開催となります。と言いましても、１回目はコロナ禍ということで書面会議での開催であったため、お集まりいただいての開催は今回が初めてとなります。

コロナの影響により、令和２（2020）年以来、活性化計画に基づく活動は停滞を余儀なくされてしまいました。しかし、コロナも３年目となりまして、社会全体が可能なものはやっていくという方向になり、今年度（令和４年度）は活動が復活したものや、あるいは、新しく参加したイベント等もございました。

本日はそうした今年度の活動報告と、来年度以降何をやっていくのか、まだ確定したものではなく、事務局で考えたものですが、こちらについて、提案をさせていただきます。

これから暖かい季節になり、気持ちも前向きになっていくのかなと思いますが、そうした中で是非忌憚のないご意見やご提案をお聞かせいただいて、水源地域の活性化に結び付けていきたいと思いますので、本日はどうぞよろしくお願いいたします。

⑵ 委員紹介

委員及び事務局による自己紹介を行った。

⑶ 議長あいさつ（宮林議長）

今回２回目ということだが、コロナの影響により初めての対面開催ということで、忌憚のないご意見を頂ければと思う。

コロナ禍において、観光動向がだいぶ変わった。昨日、東京都の奥多摩や檜原村に行ったが、このコロナ禍において何が変わったのかと言うと、人の出入りがものすごく増えた。

ただ、それが、今までのように土日だけでなく、平日も沢山の人が来るようになったということで、より多くの人が郊外の森林地域に入っているという特徴となっている。

一方、観光地においては、ソーシャルディスタンスの関係もあって、なかなか人が入らないという状況で、明暗がはっきりしてきているようだ。

そのような中で、観光に対する価値観の転換が起こっている。一つは、「健康維持・促進」という観点だ。いわゆる企業の「健康経営」という大きな流れが出ている中で、観光そのものを国民の健康医療と結びつけることで、ストレスの軽減等、メンタル面での改善を進め、疾病に発展するのを防ぐこと。それによって国家予算や企業の経営に影

響を及ぼすという動きが明確になってきている気がしている。

もう一つは、それに関係して、子どもたちの情操教育はもちろん環境教育を行うには、やはり里山体験といったような原体験が大変重要だということである。これからSociety5.0[※1]に向かっていくためには、人づくりが重要ということで、環境教育として原体験を推進していく必要がある。

さらにもう一つは、水源地域の国土保全ということで、人がいないと国土が守れない。広島で大きな災害があったが、基本的なポイントは、一番原点にある湧水箇所の小さな崩壊がより大きな崩壊に繋がったということである。現在、地球温暖化など環境危機において、ゲリラ豪雨や停滞線上前線など環境問題が明らかな中で、水源地域の環境保全と合わせて国土保全の役割についても考えていく必要があるということである。現在、この会議で議論する中で、我々が抱えている課題は、ますます重要視されてきている。

そこで水源地域の価値をどう取りまとめ、活性化をどのように進めていくかということについて、今日の会議を出発点にして、追い風のある中で受け皿を作っていけるよう皆さんの忌憚のないご意見を賜ればと思っている。

２　議題

(1) 令和４年度「かながわ水源地域活性化計画」に係る取組状況について

「令和４年度「かながわ水源地域活性化計画」に係る取組状況について（資料１）」により、事務局から報告した後、質疑応答を行った。

［質疑応答］

（安部委員代理）

資料１の13ページにおける、水源地域への交流人口の目標値について質問したい。

宮林委員からも観光客が減少して戻りきらないという話があったが、このような状況を踏まえ、計画の目標値を下方修正する予定はあるか。

（事務局）

目標値についてはコロナ禍の状況を加味していないため、目標値の達成までのハードルは高いというところではあるが、冒頭のあいさつでも申し上げたとおり、段々と日常に戻ってくるという動きとなっていることや、宮林議長からのお話にもあったとおり、水源地域はコロナ禍という状況下で逆に注目されている現状もあることから、目標値の修正については考えていない。

（宮林議長）

そうであれば、資料１にただし書を入れたほうが良い。コロナ前の計画であると記載すれば、読み手も分かると思う。

（米田委員）

取組の結果（資料１13ページ）について、全体という記載がある。ここでは水源地域というものを一括りにしてまとめてあるが、実際には、計画は地域ごとの特性に基づき進めていくべきかと思う。地域ごとの取組結果のデータはあるか。

（事務局）

地域ごとの特色を生かした様々な取組について、地域団体等に実施いただいているが、資料上は、地域ごとの取りまとめは特に行っていない。参考資料１の中で、より細かい実施結果についてご案内しているものの、地域ごとの明確な整理は行っていない。

（宮林議長）

おそらく、資料１から拾ってくると、特徴が出てくるのではないかと思う。

一つ気になったのが、前の計画では、水源地域のことを「やまなみ五湖」地域という言い方をしていて、それが県民等に分かりにくいということで、水源地域という言い方に変えた。今もイベントをやるときに水源地域を「やまなみ」と言ったり、水源地域の商品を「やまなみグッズ」と紹介しているが、「やまなみ」という言葉が丹沢地域と結び付けられるかが疑問である。

「やまなみグッズ」と言ったときにピンとくるかどうか、もう一度見直さなければならないと思う。アンケートを取るのであれば、「やまなみ」という言葉が水源地域に結び付くか聞いても良いのかもしれない。おそらく認知度を上げるヒントはそういうところにある。

令和４年度は、コロナ禍の最中ということではあったが、事務局は色々と苦労して色々な成果を出しているように思う。

⑵ 令和５年度「かながわ水源地域活性化計画」に係る取組予定と今後の課題について

「令和５年度「かながわ水源地域活性化計画」に係る取組予定と今後の課題について（資料２）」により、事務局から説明した後、質疑応答及び意見交換を行った。

［質疑応答・意見交換］

（鷲尾委員）

いくつか質問等をさせてもらいたい。一つ目は、資料２の５ページに記載されている「水源地域活性化小中学校等出前授業」についてである。説明によると、案内人からすでに同様の事業を行っていること、事業実施の希望があったことから実施するということだったが、とても光った良い事業だと思う。地域の活動主体からアイデアが提案されているということはとても素晴らしいことなので、支えていく仕組みを是非構築してほしい。折角なので、例も併せて提示いただけると、ほかの案内人への刺激にもなる。

二つ目は、資料２の12ページに記載されているニーズ調査の結果についてだが、やはり、「ダム湖は強いな」と感じる。にも関わらず、「やまなみ五湖」の認知度が高まっ

ていないという現状がある。５つも湖があるのだから、５倍強くても良い。ダム見学の魅力をもっとうまく使うべき。例えば、宮ヶ瀬ダムは「行ったら外さない」強さがある。観光放流やインクラインなど、大人心をくすぐる見所が多いと感じるので、ＳＮＳ等を使ってうまく発信してほしい。

三つ目は、資料２の14ページに記載の大学連携事業についてだが、おそらく例示で出てきたやまなみグッズを使ったレシピは事務局が考えたものか。松蔭大学は厚木の山側にあるため、愛川町や清川村と付き合いがあるが、愛川町から学生にレシピを考えてほしいと言われたとき、私は即答で断った。学生に対し、どのようなものを食べて、どのようなものを美味しいと思うのか、家族でよく食べに行く店舗について聞いたところ、ファストフードやファミリーレストランという答えが返ってきた。それが悪いということではなくて、そういう実態があるため、新しくレシピを作るのは難しいからだ。具体的に「こういうものを食べてみたい」という要望を頂ければ、その要望に応えるのが大学の役割であると考えている。恐らく専門的に食品を扱う学部や調理師養成学校があると思うので、本格的にレシピを作りたいということであれば、そちらに頼むのが良いのではないか。

松蔭大学の例で言うと、今年度は、学生と一緒に取り組める事業が無かったので、簡単なことでいいからやろうということで、愛川町のふるさと祭りに行き、学生にお小遣いをあげて愛川ブランドのものを買わせた。そして、商品の感想を町の職員がとりまとめＳＮＳ等に投稿してもらった。すごく簡単にできて良かったと感じている。

私はいつも、学生に対して、難しいことを考えると上手くいかないから、簡単なこと、すぐにできることを考えて実行するようにと話している。例えば、大きな施設を作るのが無理だったら、代わりに何が作れるか考えるといったように、やまなみグッズもやり方は色々あるのかなと思っている。知られていないことを逆手に取り、「やまなみ」とは何か調べさせるという方法もあるのかなと思っている。

（事務局）

愛川ブランドの購入の件については、やまなみグッズでもやってみたい気持ちはある。実現の折には相談させていただければと思う。

（宮林議長）

例えば、地域に根差す郷土料理や漬物でいうと、長野県の木曽町で作られる漬物は多くの乳酸菌があり健康に良いことから、その地域の住民は元気で長生きしている。地域に眠っているものがあって、そういったものが科学的な評価（例えば、健康に良いなど）を得ながらお祭り等に出てきて、ユーザーと関わることができるような仕組みがあれば面白い。

（岩澤委員）

私たちはレストランを営んでいるが、客層は、地元の人だけでなく、東京・横浜方面

が多いという実感がある。とりわけ客は、「水」というキーワードを口にすることが非常に多い。私たちの店でも水源地域の水を使用しているので、客の中で水を持ち帰りたい人には積極的に持ち帰ってもらっている。

「やまなみ五湖」という名称は、今まで議論を行ってきた中で、地元でもこの名称を知っている人がほとんどいないという現実がある一方、「水源」という言葉はすごくフィットする。「水」をキーワードにした方が良いのではないか。

資料２の17ページにある、学校の水道にやまなみ五湖のシールを貼るという事業は、「やまなみ五湖」ではなく、一言で「水源」というシールを貼れば良いのではないか。それ以外にも、水源地域の公共施設や店舗等、一般の人が使える所の水道では、「ここは水源である」ということが視覚的に分かるＰＲを行うのが良いのではないか。例えばＱＲコードを貼りつけて、そこから興味を持った人がネットを見て情報を得るという、直接的な行動に訴えかけるというのも、一つのやり方ではないか。

（宮林議長）

やはり、「やまなみ」という名称（単語）はピンと来ない。「やまなみ」という言葉を使う必要があるのであれば、「やまなみ」の後ろに大きく「水源」と付ける等の工夫をし、「水源」や「水」というキーワードを入れたほうが良い。

小学校へのニーズを高めるためには、小学校の教科書で「水源」や「水」をどのように取り扱っているのか、神奈川県内でどのように取り扱っているのか、調べ、あまり取り上げられていないようであれば、丹沢や水の問題を思い切って教科書に盛り込むなどしても良いのではないか。そのような工夫も必要である。

それから、水源地の大切さというのが、これから大きな課題になると思う。そうすると、水源を持っている神奈川にとって丹沢は貴重となるし、保全の必要が出てくる。それは、国土を守るため、体を鍛えるため、健康のため、教育のため、など色々な要素と絡み合ってくる。そうすると、丹沢の水源地域としての位置づけを深く理解するためのイベントが必要なのかもしれないと感じた。

（米田委員）

令和４年度の取組にも関連した質問となるが、水源地域の活性化と言うが、水源地域は個々の地域で個性があると考えている。そのため、その個性を分析していくことで、コーディネーターの掘り起こしの中で、地域の観光資源と組み合わせることができると考えているので、検討していただければと思う。

（宮林議長）

それぞれの地域は景観も違えば、文化も異なることから感じるものが違ってくる。地域の文化を活用していくと、地域の特色が出てくる。コーディネーターが何を説明するかという時に、具体的な説明材料は地域によって違って出てくる。そうすると案内人が生かされてくるということで、今後検討していく内容とぴったりなご意見と思う。

（米田委員）

私が体験したものだと、愛川町観光協会が企画したもので、観光協会の会員を対象とした宮ヶ瀬ダムの見学ツアーがあった。普通の観光ルートを見るツアーではなく、ダム内の通路を見せてもらうことで、ダムの構造について理解ができるような、非常に興味深いツアーだった。

水源地域には様々なダムがあり、個性がある中で、どのような取組が可能なのかということを追及すると、まずダムに関するツアーを組むと、興味を持つ人がとても多いのではないかと思う。後は、宮ヶ瀬にはダムカレーがあるが、そういうものと組み合わせたツアーも有効ではないか。

（宮林議長）

埼玉県秩父市がダム見学を行っている。結構人が入っているようだ。そのような、ダム専門のツアーなど、コアとなる活動イベントを開催し、そこに来た人達を色々な観光資源に繋げていければ良いのではないか。

（入江アドバイザー）

水源地域の「宝物」は何かということを考えていくと、水だと思う。森林資源があるからこそ、蛇口をひねると水が出る。東京農業大学は100周年の記念事業の中で、ジブチ共和国の砂漠の緑化を推進していくため、先日までアフリカのジブチ共和国へ出張していたが、蛇口の水は決して口の中に入れることはできなかった。口の中に入れる水はペットボトル水で対応していた。一方、日本は蛇口の水を飲むことができる。我々はそれが当たり前という感覚があるから実感がないのかもしれないが、水資源の豊かさというものは、日本の宝であると思う。

水源地域の活性化の中で、大切になってくるのは、水がどういう営みの中で、蛇口から出てくるのかということを伝えることだと思う。だからこそ、ＰＲ活動をはじめ、子供たちの原体験も大切だなと思って、話を聞いていた。

もう一つは観光の話で、ひとづくり、ものづくり、ことづくりという言葉があるが、学生たちが商品開発を行うのはなかなか難しい話である一方で、今は学生たちを含め多くの人の中で、「文化」や「暮らし」に対するニーズが高まっていると感じる。地元の食材を使った料理体験や、炭作り、薪割り等、普段地元の方の暮らしを体験することが一つの観光資源となるので、「ことづくり」の開発をするという観光のあり方もあると思う。

（宮林議長）

社会はモノ消費社会からコト消費社会へと転換している。地域の文化、暮らしを体験していくということが、外国でも重要視され、インバウンドになっていく。そうすると、丹沢には資源が沢山あるのではないか。そういうものをピックアップしていくと良い。徐々にできるところからやっていくと良いのではないか。

根本的な大きな課題である水から、コトの問題というものに大きくシフトしてきた。日本は水を重要視していない。3000ヘクタール近くの日本の森林が海外の資本に喰われている。水のない国が水源林を買い、水を持っていこうとするという傾向が見えている。丹沢は該当しないかもしれないが。そういう意味では、水は21世紀後期においてはダイヤモンド以上に貴重なものとなるかもしれないことから、水源を守るために、水源の森を作るということを一つの課題としても良いかもしれない。

例えば、小中学校の子ども達がどんぐりを拾い、育てたものを植えていく。それを「子どもの森」や「水源の森」として、植林し、森を育てていく。そうしていくと、その間に色々な交流が始まったり、環境教育や人材教育を行うことができるのではないか。苗木を作るための費用は補助金から捻出することができ、さらに育てた苗木は売ることができるため、地域のＮＰＯ団体等に苗木の育成を行わせれば、地域にお金が落ちる。森林組合も行うことができるだろうが、今の森林組合は忙しく、木材を切って出すことを優先としていることから育林事業が行われていないことが多い。そうすると、心配なのは山づくりが疎かになることであるが、交流による苗木生産や育林事業など、地域にお金が落ちる仕組みをつくることができると、経済性も生まれてくると思う。

（中里委員）

「やまなみ」という名称をずっと使ってきているが、観光客等から「やまなみ」とは何かとよく聞かれる。できれば、「やまなみ」に「神奈川水源五湖」等の単語を併記するようにして欲しい。折角水源地域の活性化のための施策を行っているのだから、「水源」という言葉を入れたほうが良いのではないか。

（宮林議長）

中里委員のご意見への対応は可能ではないか。前もこのような議論を行ったが、最初は「やまなみ五湖」を普及しようとして、のぼり旗を作ったりしたが、認知されない。「水源」という言葉はかなり重要なキーワードなのではないかと思う。

（事務局）

実は計画の中には、「やまなみ五湖」に代わる名称の検討を行っていく旨記載があるが、既存の名称に代わる画期的なものはなかなか生み出すことができていない。

（宮林議長）

水源地域活性化施策の中で「やまなみ」という言葉を使っている以上、簡単には直せないところだと思うが、私が10年以上携わっている中でも、「やまなみ」という名称が浸透していないという感覚がある。

（鷲尾委員）

すごく検討を重ねて作った名称であるとは思う。のぼり旗についても、「やまなみ」

という言葉が持っているイメージを具現化できていて良かったと思っている。「やまなみ」という言葉に「水源」を組み合わせることにより、青い山々の中に水源があるというイメージが浮かぶ。折角作った名称なのだから、「水源」という言葉と併用して「やまなみ」を使っていってほしい。

（宮林議長）
　だとすれば、「やまなみ水源地（または池）」というようにすると良いかもしれない。

（鷲尾委員）
　現行のやまなみ五湖のアイコン※2は分かりやすい。どのような時に使っているのか。

（事務局）
　「やまなみグッズ」のＰＲシールのアイコンとして使用している。他にもロゴマーク※3を作成しており、そちらは「神奈川やまなみ五湖navi」のアイコンや、かながわの水源地域キャンペーンで配布したエコバッグのロゴマークとして主に活用している。アイコンとロゴマークは明確に使い分けているわけではないが、いずれも使用しているものである。

（宮林議長）
　色々なものづくりを行っているようであるが、なかなか浸透していかないのは、難しいところだが。アイコン・ロゴマークは今後も使っていくことでよいが、そこには工夫がほしい。

（志村委員）
　30年以上前に「やまなみ五湖ネットワーク構想」に携わっていたが、その際は相模川の「いきいき未来相模川プラン」と水源地域の「やまなみ五湖ネットワーク構想」に基づく、ダイナミックな発想で県土施策をスタートしていた。その際に丁度アイコンが作られている。
　宮ヶ瀬湖の観光客数はコロナ前の９割ほどまで回復してきており、かなり活性化のベースが出来てきていると感じている。私は相模ダムや城山ダムの仕事にも携わっているが、その中でも「水源地」という言葉を一つのキーワードとして考えることが大切だと思う。
　例えば、宮ヶ瀬にある水とエネルギー館では、横浜市や相模原市の小学校が社会見学等で訪れるが、統計を見てみると、川崎の小学校が来ていなかった。川崎は多摩川があるため、昔からあまり水に苦労していなかったことが背景として考えられる。一方、横浜市は水に苦労したため、神奈川県が力を入れて、相模ダム等を作り上げて水源を確保してきたという歴史がある。津久井湖は横浜水道の遺跡等がある等、水源地は水の歴史が凝縮されている場所だと思う。

宮ヶ瀬ダムは新しいダムで、先ほどお話があったように、観光放流や工事用のダンプを運ぶ施設を再活用したインクラインなど、観光に力を入れた構造になっている。相模ダムは作られた経緯もあり、そのような観点で作られていない。いずれにせよ、ダムが作られることになった歴史を知ってもらうと、魅力がある事業ができるのではないか。

清川村の小学生は、アフリカの子ども達とＺＯＯＭを使った交流授業を実施している。タウンニュースにも取り上げられた。清川村の５，６人の児童に対し、アフリカは70人の子どもが参加しているようだ。Instagram等の世界とコミュニケーションを行うことのできる媒体を使うと、色々なところと繋がりができ、魅力ある事業ができるのでは。日本だけでなく世界への発信もできれば良いと思っている。

全国のネットワーク会議に行くこともあるのだが、宮ヶ瀬ダムの認知度はあまり高くない。黒部ダムは高いのだが。相模湖は一番古い方の湖であると思うので、うまく知名度や歴史等を活用していくと力強い事業ができるのではないか。

（中里委員）

相模ダムは７年計画で修理をするということで、修理をしている状況を見学できるように企業庁が考えているため、観光のスポットとして活用していこうという計画も持ち上がっている状況である。

（宮林議長）

熊本城は修復しているところを観光ルートにしている。今しか見られないということで皆が訪れているので、相模ダムも同じように活用したら面白いかもしれない。

（鷲尾委員）

大阪府民は琵琶湖が水源地だということを皆が知っている。なぜ神奈川県民はどこが水源地か知らないのか、不思議である。蛇口にシールを付けるというのはすごく良いアイデアだと思うが、あまり細かい字だと見えないので、アイコン・ロゴマークを活用した形も良い。水道の先にやまなみ五湖があるということを小さい頃から意識付けをさせていった方が良い。

（宮林議長）

自分の使っている水がどこから流れてくるのか、歴史を知りながら関わっていくというのがあるべき形の一つだと思う。

（齋藤委員）

我々は愛川町観光協会の事務局も兼任している。「水源」ということで色々とアイデアを出してもらっているが、既に各エリアでは観光振興やエリアマップなどにかなり力を入れており、観光に関する情報を持っているので、そういったことを繋げていけたらと思う。令和５年度以降、愛川町でも色々とイベントや事業を再開していくので、そう

いった情報を吸い上げて連携してもらえたらと思う。

（宮林議長）
　ぜひ連携して事業を実施いただけたらと思う。

（嶋崎委員代理）
　大学の連携事業の関係で話をすると、我々清川村は相模女子大学と連携し、清川村のお茶を題材に共同した食品の開発を行った。宮ヶ瀬のクリスマスイベントにおいて、試行販売を実施したところ。資料２の14ページのレシピの共同開発について、実際の事業実施は難しいと思うが、大学生などの若い世代の意見を求めながら商品を開発するということは、様々なところから注目されるということもあるので、ぜひこの取組を行ってほしい。

（宮林議長）
　大学生も受け皿を作れば参入する者は少なからずいると思うので、地元で受け皿となるためのプログラムをつくれれば、学生たちや入込者が自由なアイデアを出してくれるのではないか。

（安部委員代理）
　相模原ではＰＲのためにインフルエンサーを呼んで情報発信をするという事業があったが、行政主体であったためあまり面白いものができていなかった。ただ、やまなみ五湖でも、自主的に情報発信してくれるような人材は何人もいるため、行政でそういった人々の手を借りて何かできれば良いなと考えている。

（宮林議長）
　水源地に民間組織、サテライト（ＤＭＯ[※4]）のようなものがあれば良いのだが。そこで色々とアイデアを出していくような構造ができると良い。最初の３年間程度は補助金がないと上手く回らないとは思うが。補助金を使った造林作業は地域にお金が回ると思う。

（榎本委員代理）
　旧津久井町の町立小学校時代に、「私たちの津久井」という郷土を学ぶための教科書があり、その中で津久井湖が神奈川の水がめであるということを学んだ。学校教育で、もう少し水がめについて話をしていくことができると良いのではないか。
　水を供給するための４つのダムと、観光の役割を兼ねた平成のダムである宮ヶ瀬ダム等、宮ヶ瀬ダムと他の４つのダムとでは性質が大きく変わってくると思う。相模ダムはリニューアルの際に見学コースを作る構想もあるし、城山ダムも年に数日ダムの中を見るコースがあるので、そういったものも生かしていけたら良い。

上下流域自治体間交流事業では、平成30年度に厚木市の住民を呼び、宮ヶ瀬ダム周辺振興財団の協力のもと、ミーヤ館や宮ヶ瀬ダムの堰堤の中に入り、遊覧船に乗り、鳥居原のふれあいの館へ行き、案内人の協力の下、草花を活用したリース作り体験を行った。客層は50～60代の女性が多かったが、大変好評だった。旅行会社によるツアー化ができれば良いなと思う。

（宮林議長）
地元の中の繋がりを生かした事業として、とても良い取組になる。やはり、地元がやる気を出して、参加型の水源地域にすると良いように思う。

（事務局）
上下流域自治体間交流事業は、現在も継続して実施している。実際に、愛川町に実施していただいている事業の中では、下流域の方々に水源地域に来てもらい、ダムの見学等を行ってもらっている。こうした、既存の事業をＰＲすることで認知度を上げていくことが出来るのではないかと感じた。今既に様々な取組を行っているということをご紹介いただいたので、ＰＲに結び付けていきたい。

（宮林議長）
小中の学校部門と大学生の学習部門と一般のダムツアー部門、そして体験教室部門といったように、事業のターゲットを絞り、地域の特徴を部門ごとに当てはめていくと良い。
また、企業との関わりも重要である。今、企業はＳＤＧｓ[※5]やＣＳＲ[※6]に力を入れており、何とか環境に貢献しないといけないという義務感が強まっているため、たくさんの企業がグリーン化事業や子どもの教育、地域づくりに貢献しようという動きになっている。どういう企業と行政がどう関わっているか、水源地域のモデルを作ってＰＲしていくのも一つの手法かもしれない。
約３年前から、企業の労働者の約２割がストレス症候群にあることや、国の社会保障費が５割を超えているという現状からも、社員の健康管理は企業が行っていくべきという潮流となりつつあり、健康経営の考え方が広まってきている。
森の体験で体内環境を計測すると、免疫成分が改善されたり、血圧が下がったりといったデータが取れた。そのため、このようなエビデンスを示し、森の中でセラピー等を体験できる事業の仕組を示せば、企業は積極的に参入するだろう。健康保険を活用できれば、安価で体験ができ、地元には経済効果もあるという仕組みを構築できれば良い。
学校教育では、林野庁が「子どもの森」構想を作ろうとしている。既存の取組だと「緑の少年団」というものがあるが、小学校が忙しいため、機能していない状況にある。それを「子ども」ということで対象年齢を保育園・幼稚園児まで拡大すると、森の体験と森づくりなどにより、祖父母も一緒に来て手伝ってくれるようになる。そうすると、山に関わっていく人口が増えることになり、山での活動が国民運動に転換する良いポイン

トになるのではないか。子どもから高齢者までが森に関わることとなる。

神奈川県の例だと、横浜市や川崎市の「子どもの森」を丹沢に作り、交流する機会を作れば繋がりが出来ていくのではないか。ということで、ターゲットを決めて、もう少し掘り下げていくと面白いアイデアが出るはずだ。

しかし、これは県だけがやっていては始まらない。地元も一緒に立ち上がり、協同するグループが生まれ、連携していかなければならないと思うので、本会議の委員等の繋がりを高度に使い、サテライト事務局を作っていけるとホームページも日常的に変わっていくだろう。ホームページは見ても、いつ、どのように、どこの水源地域に行ったらよいのか、ルートが見つけにくい。サテライト事務局があれば、案内も分かりやすくなると思う。

（入江アドバイザー）

２月の初め頃、群馬県の川場村に行って集落の方と一緒に道づくりを行っている。その中で、山の中を学生と一緒に歩くのだが、その時に学生は、案内してもらわないと山には入れないと言っていた。やはりその部分が大切で、案内人の方々の一つの大きな役目として、森の中に子どもたちや一般の方々を案内するという仕組みや、コーディネートを行いつつ、皆で古道を復活させたり、森の歴史の解説など、地域の風景作りに寄与するようなことを行っていただくのも、観光プログラムとしてあっても良いと思う。

富嶽三十六景等、いろいろなものがあると思うが、「やまなみ五湖」の風景や景観を加味しながら、ルートづくりを行うことも、意義のある面白いプログラムになるのではないか。

（宮林議長）

景観というのは佇まいの集合体で、歴史はまさに佇まいとして景観が形成されている。だから地域にはその地域の特徴があり、それを説明することにより物語になり、地域独特の観光文化になると思っている。水源地域にもそのような素材が沢山あるのではないか。

（事務局）

本日は様々なアイデアや根源的な話を頂いた。皆様の水源への情熱が感じられて嬉しく思っている。本日提案させていただいたものの中では、出前授業について評価を頂いたというところと、水源のシールが想定よりも評価いただいたことを嬉しく思っている。

委員の方々は水源地の大切さというものを認識され、お話しいただいていた印象があるが、宮林議長からは、できるところから実施していけば良いというお話しもいただいたので、本日の話を取りまとめ、また、皆様と相談させていただければと思う。

（宮林議長）

段階的に整理をしながら、進められるところは進めていくということと、地元がやろ

うとするものがあったら、優先してどんな小さいところでも吸い上げてやっていけば良いと思う。

今後もこのようなフリートーキングの場所を適宜作ってもらい、色々な形でアイデアを挙げてもらえたらと思う。あるいは、大学の連携の中で、学生が集まる場が出来れば、そこで議論するのも面白いアイデアが出てくるのではないか。

山梨県小菅村には以前源流大学があった。そこでは、Ａという地区からＢという地区に行くための道を復活させようという事業が学生たちから挙がった。ただ復活させるだけだと面白くないので、昔の話を聞いてみたところ、ろうそくや線香で道のガイドをした話や、大きな石や道のいわれ等の話が出てきた。こういった話は学生達にとっては目から鱗で、色々な事を考え始める。そうすると活動のプログラムとして使えるものが出てきて、地域に入ることがたまらなく面白いこととなる。そしてそのことに人が集まってくる、人が入ってくるようになる。これからこういった「物語をつくること」が大きな観光資源となる。

「やまなみ」という言葉の響きは非常に良いが、「やまなみ五湖」と言った時に知名度がまだ薄いと感じる。「水源」という言葉を入れて、神奈川の水源は丹沢であり、保全していくことにより、大切な水の利益を享受していくことができるという両側面（丹沢地域は県民の共通財産）をうまくアピールし、今後の事業を行っていったら良いのでは。

子ども達に対する事業としては、是非教育委員会とも相談し、水源地域に対する神奈川県独自の文言が教科書に入っても良いと思う。

（事務局）

本日はありがとうございました。

３　その他

事務局から次回開催に向けての事務連絡を行った。

以上

※１ Society5.0：サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会（Society）。狩猟社会（Society 1.0）、農耕社会（Society 2.0）、工業社会（Society 3.0）、情報社会（Society 4.0）に続く、新たな社会を指すもの。

※２ アイコン　：

※３ ロゴマーク：

※４ ＤＭＯ　：観光地域づくり法人（Destination Management/Marketing Organization）。地域の「稼ぐ力」を引き出すとともに地域への誇りと愛着を醸成する「観光地経営」の視点に立った観光地域づくりの舵取り役として、多様な関係者と協同しながら、明確なコンセプトに基づいた観光地域づくりを実現するための戦略を策定するとともに、戦略を着実に実施するための調整機能を備えた法人。

※５ ＳＤＧｓ　：持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals）。2001 年に策定されたミレニアム開発目標（MDGs）の後継として、2015 年 9 月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」にて記載された、2016 年から 2030 年までの国際目標。

※６ ＣＳＲ　：企業の社会的責任（Corporate Social Responsibility）。企業が社会や環境と共存し、持続可能な成長を図るため、その活動の影響について責任をとる企業行動であり、企業を取り巻く様々なステークホルダーからの信頼を得るための企業のあり方を指す。